

2013年度人間福祉学部報

■ 社会福祉学科



社会福祉学科では、1年生の秋学期から演習、実習指導の科目や、実習、インターンシップ、フィールドワーク、等の体験型の科目実践教育プログラムなど、様々な体験と学びを提供しているが、本稿ではこれらの多様で充実した実践教育プログラムのなかでも、今年度よりあらたに動き出した「福祉社会モデル」の「福祉社会フィールドワーク」について報告する。

従来の社会福祉学科では、社会福祉士、精神保健福祉士といった国家資格取得を目指すカリキュラムが中心で、社会福祉の現場での体験は本カリキュラムのみで可能であった。このため、国家資格取得を希望しない学生に対しても、将来において、市民・非専門職の立場で、職場、家庭、地域社会、国際社会などにおいてそれぞれが抱える課題を社会福祉の視点から関わり、社会全体の福祉実現に貢献していくことを意図する学生を対象に、各自が具体的なテーマを設定し、そのために市民として必要となる社会福祉学、法制度、ソーシャルワークや周辺諸領域の基礎知識とスキルを習得し、あわせて市民の立場から実践を展開していく上での課題と展望を見いだしていくことを目的として、演習や現場での体験(実習)する機会を与えるため、2012年度以降の入学学生を対象に、

「福祉社会履修モデル」を示している。具体的には、2年次(2013年度)に「福祉社会演習」として、室田クラス(歴史)、前橋クラス(ミクロ)、陳クラス(マクロ)の3つのクラスが開講されている。今後は3年次(2014年度)に、実践現場を体験できる「福祉社会フィールドワーク」「福祉社会フィールドワーク指導」を新たに開講することになる。

2013年度は内容の決定とフィールドワーク先との調整、学生のニーズ調査・面談、配属を行い、約10数人の希望者に対して仮配属を行った。その内容は以下の3つの型に分かれる。

- (1) 「体験学習」重視型 ～通い型プログラム～
コミュニティへの貢献を学びの中心に据え、都市部で地域に根付いたNPO等へ通いながら見学・体験。当該地域の資源分析やリサーチを通じた資源、プログラムの開発(提案)を行う。
- (2) 「スタディツアー」型 ～夏季集中型プログラム～
市民的責任感の習得を学びの中心に据え、過疎集落や離島、海外でのスタディツアーを行う。
- (3) 「リサーチ」重視型 ～見学・ヒアリング型プログラム～
アカデミックな学びの習得を学びの中心に据え、

制度・政策により排除を受けてきた歴史を持つ地などを訪れリサーチを実施する

限界集落、過疎の問題を考える。

具体的には、①「特定非営利活動法人山科醍醐こどものひろば」(「体験学習」重視型・京都市山科区)、②「大阪市釜ヶ崎(あいりん地域)」(「体験学習」重視型・大阪市西成区)、③「株式会社 YEVISU」(「体験」重視型・西宮市)、④「三重県松阪市飯高町波瀬地区(過疎地)」(「スタディツアー」型)、をフィールドワーク先に予定している。

また、2014年度の実績を踏まえて、2015年度以降は国家資格のためのソーシャルワーク実習ではできない、より自由で魅力的なプログラムを開発していく予定である。

(岩本 裕子)

(なお、「リサーチ重視型」は、学生との調整の結果今回は見送られることとなった。)

詳細は以下のとおりである。

- ①「特定非営利活動法人山科醍醐こどものひろば」では、「子ども、子育て、子供の貧困(家庭)、まちづくり」などをキーワードに、貧困家庭の子どもに対する学習支援サポート、貧困活動支援サポート、地域の社会資源調査、貧困家庭の子どもの支援プログラムの企画・提案などをおして、地域の子どもたちの置かれている現状や支援、貧困家庭を生み出さない社会を創っていく方法を考えていく。
- ②「大阪市釜ヶ崎(あいりん地域)」では、「貧困、社会的排除、不安定就労、生活保護、ホームレス問題、まちづくり」をキーワードに、炊き出し体験、夜回り体験、生活史の聞き取り調査、地域の社会資源調査、地域のイベントの企画・運営などをおして、様々な福祉課題が複合的にあられるこの地域での体験を通してその解決方法を探る。
- ③「株式会社 YEVISU」では、「障害児支援、デイサービス、集団への支援」をキーワードに、地域で生活する障害児やその家族と向き合うなかで、障害児とその家族が置かれている現状を知り、そのあり方を探る。
- ④「三重県松阪市飯高町波瀬地区」をフィールドワーク先に、「過疎、高齢化、自然、暮らし、共生、伝統」をキーワードに、自然を生かした体験プログラムの担い手としての参加、各戸訪問による、生活や暮らしの聞き取りと、ライフレビューブックの作成、夏祭り(盆踊り)でのブース出店などをおして、生活という視点から

■ 社会起業学科



社会起業学科開設6年目を迎えました。本年度は81名の1年生が新たに加わり、2年生88名、3年生74名、4年生86名、総勢329名でスタートしました。

人間福祉学部が開設された2008年度以降、本学科ではさまざまな取り組みを行ってきました。反省点や課題を多く残すこととなった取り組みもありましたが、それらを教職員のみならず、時には学生とも共有しながら改善することにより、魅力的な取り組みとなるよう努めてきました。本年度も学科の特色を反映した取り組みを数多く実施しましたので、その概要を下記に示します。

①社会起業学科新入生歓迎プログラム2013「これが社起やDAY」

日 程：2013年4月20日（土）

会 場：関西学院大学G号館および学生会館
新館1 F OFF TIME

参加者：1年生67名、学生スタッフ12名

内 容：礼拝、実践教育関連科目の紹介（社会起業フィールドワーク（海外）のビデオ）、ゲストスピーチ、アクティビティ、懇親会

ゲスト：垣内俊哉氏（株式会社ミライロ 代

表取締役）

岸田奈美氏（本学科4年生、株式会社ミライロ バリアフリーマップ事業部長）

林幹広氏（株式会社FC岐阜事業本部企画広報課長）

②英語短期留学

社会起業学科の独自プログラムである英語短期留学に、本年度は12名が参加しました。カナダ・クイーンズ大学のSchool of Englishにおいて、国際的なソーシャル・サービス領域で働いたり、起業したりするために必要な語学の修得に努めました。8月に帰国し、11月に英語短期留学参加者による報告会を実施しました。

③社会起業インターンシップ

1) 国内インターンシップ

今年度は8名の学生が国内インターンシップに取り組みました。国内の社会的企業、NPO、福祉・介護関係機関及び団体、公的機関、民間企業などにおいて、3年生の夏季休暇中に3週間の日程で行いました。インターンシップ先は下記の通り。

NPO法人地域環境デザイン研究所ecotone
NPO法人キャンサーネットジャパン
隠岐の島【山陰観光開発(株)、NPO隠岐しぜんむら】
NPO法人ノーベル(病児保育)
NPO法人オーガニック・ライフ・コラボレーション
NPO法人関西子ども文化協会
有限会社シサム工房

取材させていただき、その様子を示すビデオを作成しました。インターンシップ先は下記の通り。

多文化プロキューブ
NPO法人コリアNGOセンター
NPO法人山科醍醐こどものひろば
NPO法人暮らしづくりネットワーク北芝
NPO法人Homedoor

2) 海外インターンシップ

今年度は4名の学生が海外インターンシップに取り組みました。海外での社会貢献活動について学ぶこと、海外での実践力を高めること、異文化の環境のなかで働く能力を養うこと、社会の問題と課題を把握し取り組む能力を高めること、を目標に、夏季休暇中に6週間のインターンシップを行いました。インターンシップ先は下記の通り。

イギリス：ノーザンプトン大学を通してイギリスの社会的企業を学ぶ

- ・Northamptonshire County Center, Goodwill, Oxfam
- ・Northamptonshire Council Extended Services, Youth Work, Acorn Childcare Day Nursery

自由選択

- ・フィリピン：Kanlungan Sa ER-MA Ministry (ストリートチルドレンの支援)
- ・インド：Niranjana Public Welfare Trust (貧困にある子どもたちへの教育支援)

2) 海外フィールドワーク

今年度は12名の学生が海外フィールドワークに取り組みました。“現場で学ぶ国際協力”をテーマに、2月にカンボジアを訪れました。現地では、子どもの教育、人身売買、ストリートチルドレンの課題にかかわっている団体や施設への訪問を行い、途上国が抱える貧困の課題と国際協力、社会起業の現状について学びました。国内フィールドワークと同様、団体を取材させていただき、ビデオを作成しました。インターンシップ先は下記の通り。

Friends International (ストリートチルドレン支援)
Life with Dignity (農村地帯での教育支援)

⑤実践教育報告会

人間福祉学部各学科の実践教育を報告する場として12月7日(土)に開催された人間福祉学部実践教育報告会において、インターンシップを行った学生全員がポスター発表を行い、フィールドワークに取り組んだ学生が作成ビデオを披露しました。

④社会起業フィールドワーク

1) 国内フィールドワーク

今年度は27名の学生が国内フィールドワークに取り組みました。“現場から学ぶ社会起業の課題と取り組み”として、街に出て、社会的課題に直面している当事者の方や問題解決に向けて取り組みを行っている社会起業家にお会いしました。その中で、問題解決に取り組む姿勢を学び、人と会い、質問しながらお話を聞き、それをまとめて整理し、他人に伝える技術を獲得することを目的に、団体を

⑥社会起業学科独自イベント

12月7日(土)、就職活動や職業選択について卒業生と在学生在が語り合う学科独自イベント「社社の卒業生と語ろうー社会起業学科の学びと仕事ー」を実施しました。4名の卒業生(話題提供者3名、司会1名)を招き、卒業生にふだん思っている疑問をぶつけ、自分の将来について考える有意義な時間となりました。

(林 直也)

■ 人間科学科



2008年に96名の入学生を迎え入れて始まった人間科学科です。学部学科開設から5年を終えた2012年度末に、112名の卒業生を二期生として送り出しました。就職決定率は、97%と変わらず健闘しています。

さて、6年目を迎え、4月に、また新たに118名の学生を迎えました。2013年度は460名でスタートになります。

新入生に向けて、人間科学入門という科目が、学科の理念の理解を深めてもらうと同時に学科で何を学べるかをより具体的に感じてもらえることを目的として開講されていますが、「佐藤君の一生」というストーリーのもとで、各教員が自らの専門領域に関連した講義を行う形が続いています。

春学期に開講される、この人間科学入門に加え、秋学期に、人間科学実習入門が2012年度から開講されています。人間科学入門で学んだ専門領域について、より具体的に学ぶ機会ですが、この科目の特徴のひとつに合宿が組み込まれていることは、これまでに報告した通りです。2012年度では、この合宿を甲山自然の家で2回に分けて行いました。この形では、同じ学年が一堂に会せないという反省もあり、今年度は全員が参加できる宿舎を求め、南あわじ市にある国立淡路青少年交流の家で、10月26、27日の日程で行うことになりました。

直前には台風27号が接近、実施が危ぶまれましたが、南に逸れ事なきを得ました。

26日、8時30分に、参加学生114名が正門内に集合し、バス3台に分乗し、11時過ぎには宿舎に到着しました。初日は、体育館でのアイスブレイクの後、昼食。午後は、心拍計を装着して、標高差およそ100m、往復およそ7kmの距離を折々に心拍数をチェックしながらグループ毎に踏破しました。この距離は、普段スポーツに親しんでいない学生にとっては厳しいものであったかと思いますが、グループ内での思いやる様子も見られ、共に学ぶ意識が高まったのではないかと思います。

夕食後には、ケータイを切り、友達と語らうこともせず、アイマスクをつけてひとりで過ごす時間を設定、日常の様々な刺激、情報を遮断したときに何に気づくかを体験しました。この体験の振り返りでは、様々な気づきが報告されましたが、惜しむらくは、多くの学生が瞑想ではなく、睡眠に陥っていたことであります。

2日目は、1日目に行った心拍数の計測結果を元に、運動量を算出するなど、運動負荷が身体に及ぼす影響を学びました。また、グループに分かれて、自分は何の様な人間か、自分のアピールするところは何かを考えることから自らを知るワーク、パーソナルアイデンティティ作りの時間をも

ちました。

座学では学べない体験を通しての学習は学生にとって有益であり、また、人間科学科に個性あふれた学生が所属していることを実感するとともに、新たな人間関係を結べたものと思います。

今年は、教員も8名、実習支援室から2名が参加、指導に当たりましたが、プログラムの多くが佐藤先生、甲斐先生の力にたよるものであったこと、また実践教育支援室の武津、日下田両助手の助けを得てのものであったことを付記しておきたいと思います。

新入生に限らず、各学年が、人間科学科らしく、人と人との繋がりを学ぶ1年でしたが、ここで、二人の仲間を突然失ったという、哀しい報告をしなければなりません。

4回生の木村美穂さん、1回生の小島佳奈子さんのお二人です。

木村美穂さんは、これまでの学びや経験を活かし、新しい世界に踏みだそうとするときに亡くなりました。

小島佳奈子さんは、人間科学科での学びをこれから深め、様々な学生生活をまさに経験していこうというときの急逝でした。

お二人それぞれに、可能性に満ちた未来があったことを考えると、様々な思いがわいてきます。それはどのように言葉を連ねても、言い表しきれないものです。

ここに、お二人のご冥福をお祈りしたいと思います。

(井出 浩)

■ 言語教育

必修英語科目

人間福祉学部では必修外国語科目として英語講読と英語表現を設けています。学生の習熟度と第2外国語の選択科目に対応するため、昨年度よりクラス編成を14から15へ増加しました。流暢さの向上と素早く的確に情報を読み取る能力を養うために英語講読で行っている多読課題は、副読本の拡充と管理の適正化をはかり、学年により図書館蔵置のものと学部資料室蔵置のものを使い分けています。専門教育への橋渡しとなるべく、人間福祉学部の社会福祉・社会起業・人間科学3学科と英語科の教員が分担執筆したテキスト(『Living in Society: From People to Persons』2011年1月、南雲堂)は2年次の英語講読で引き続き使用していますが、内容の刷新と時代のニーズへの対応をはかるため、2015年度から使用する新たな教科書の編纂作業を開始しました。

また、より英語力を高めたい学生には、必修英語科目に替えて受講できるプログラムや科目が別途用意されています。2013年度以降入学のレベルの高い英語を学びたい学生は、一定の要件を満たせば1年生春学期、または1年生秋学期から開講される週2回・2単位の飛び級コース(アドバンスト・イングリッシュ、スーパーアドバンスト・イングリッシュ)を履修することができるようになりました。なおこれらのコースを受講する場合、後述の人間福祉学部が提供する英語コミュニケーションを第2言語として選択することはできませ

ん。2014年度は更に多様な授業に参加できるようになります。外国人留学生には日本語Iを必修科目として開講しています。

第2言語科目

選択必修の第2言語としては、人間福祉学部が用意する英語コミュニケーション、日本手話、および言語教育センターが用意するスペイン語、フランス語、ドイツ語、中国語、朝鮮語のうちの1言語を1・2年次4学期間履修することを義務付けています。原則として途中で言語を変更することは認めていません。なお外国人留学生用選択科目として基礎英語を用意しています。以下に①英語コミュニケーション、②日本手話、③スペイン語についての概略を紹介します。

①英語コミュニケーション

英語コミュニケーションの授業では英語による異文化間コミュニケーション能力育成と多文化共生意識の涵養をはかり、ゲストスピーカーを招いた授業や交換留学生との交流を取り入れた授業も行っています。ゲストスピーカーの選定にあたっては、英米出身であっても英語圏における文化がもつ多様性を伝えられる方を講師とするよう心掛けていますし、非英語圏出身者で国際共通語として英語を用いた活動をしている方に、その活動フィールドや内容などを語っていただいています。春学期には在イスラエル日本国大使館での勤務の後、パレスチナでオリブオイル生産・販売と日本などへの輸出を

すすめるNGO/NPOで活動されている小松幸治氏をお招きし、その経験を英語で講演していただきました。また秋学期にはA.マーンズ氏にニューヨークと米文化について講演していただきました。

②日本手話

本学部の設置趣旨に沿い、受講希望者も多い科目が日本手話で、おおよそ次のような授業を行っています。

手話実技の練習には学生一人当たり一定の空間が必要となるため、1クラス15名に限っています。週2コマのうち1コマをネイティブ・サイナーの講師による実技学習に充て、もう1コマを「聴者」講師による「ろう文化概論」「日本手話概論」「文法」などに充てています。

実技学習は、手話で手話を教えるダイレクトメソッドを採用、また幼児の言語習得原理に基づくナチュラル・アプローチを中心に進めています。授業では口話は禁止され、音声日本語の干渉を受けない環境の下で手話習得を促進し、同時にろう者の基本的会話マナーを学んでいきます。「ろう文化概論」では、ろう者のゲストスピーカーを招いていますが、その様子を録画し、資料室で閲覧可能にしています。授業で学んだ日本手話を授業外でも活用できる機会として、ろう者を招いての交流会、有志による施設見学、日本手話でろう者を観光地ガイドする体験、なども実施しています。

2年次の秋には、グループによる日本手話やろう文化に関する「日本手話研究会」を開催し、音声日本語でプレゼンする際の手話通訳の利用方法を学ぶ機会を設けています。

③スペイン語

スペイン語は言語教育研究センターが提供している科目であり、全学共通カリキュラムにより運営されています。しかしスペイン語圏でも特に中南米は、貧困などの多くの社会問題を抱

えている点、また近年急速に発展し、外国資本の流入が大きくなっている地域が増加している点など、人間福祉学部の学生が学んでいる事柄を活かせるフィールドであると言えます。また、日本国内にも中南米からのニューカマーが多く在住し、スペイン語や近縁のブラジル・ポルトガル語文化への理解が地域社会の福祉を考える上で必須となっています。そのためスペイン語科目を履修する本学部生には2年間の履修期間が終了するときには、自分自身や自分自身を取り巻く事柄を簡単なスペイン語で表現でき、辞書を使えば、本やインターネットなどで自分に必要な情報を得ることができるようになることを学習目標としています。授業は週2回開講されていて、1クラスは日本人教員が主に文法を教え、もう1クラスはネイティブ教員が会話や言語運用の授業を行っています。

人間福祉学部では、例年30名前後の学生がスペイン語を履修していますが、多い時には約半数が抽選で落選して第1希望の言語を履修できず、仕方なく第2希望のスペイン語を履修しているという状態です。そのため、最初はモチベーションが上がらず、なじみある英語とは異なるスペイン語の特性のためにやる気をなくす学生もいますが、1年目の秋に入ると、複雑な動詞の活用にも慣れてきて、「面白くなってきた」と熱心に勉強し始める学生も少なくありません。授業ではスペイン語で意思伝達や情報収集ができる学生の育成に重点を置いてはいますが、スペイン語圏やスペイン語圏出身者に関する情報を常に与えて、学生たちにとって身近な問題として考えるきっかけづくりができるように努力しています。おかげでスペインへ短期の語学研修に行く学生が毎年数名おり、なかには1年間の留学を果たす学生もいて、スペイン語圏の多様な文化に触れ、人々と交流して意義深い体験をして帰国しています。

(福居 誠二)



■ チャペル

日時	担当者	主題 (奨励題)
4月8日(月)	樋口 進 (宗教センター宗教主事)	チャペル・オリエンテーション
12日(金)	樋口 進 (宗教センター宗教主事)	チャペル・オリエンテーション
15日(月)	広瀬康夫 (宗教センター職員)	讃美歌を歌おう①
19日(金)	広瀬康夫 (宗教センター職員)	讃美歌を歌おう②
22日(月)	石川久展 (社会福祉学科教員)	「聖書を読もう」
26日(金)	上ヶ原ハビタット	活動報告
29日(月)	聖歌隊	讃美歌を歌おう③
5月3日(金)	グリークラブ	音楽チャペル
6日(月)	樋口 進 (宗教センター宗教主事)	「思いやり」
10日(金)	混声合唱団エゴラド	音楽チャペル
13日(月)	小西砂千夫 (社会起業学科教員)	「“神があなたを招いた”の続き」
14日(火)	大学合同チャペル (第1日)	{ ※総主題: 「建学の精神」 於: G号館IS棟303号教室
15日(水)	大学合同チャペル (第2日)	
17日(金)	木原桂二 (北山バプテスト教会牧師)	「《待つ》という関わり」
20日(月)	ゴスペルクワイア	音楽チャペル
24日(金)	中野陽子 (人間福祉学部教員)	人間について考える①
27日(月)	孫 良 (社会起業学科教員)	人間について考える②
31日(金)	バロックアンサンブル	音楽チャペル
6月3日(月)	林 直也 (社会起業学科教員)	人間について考える③
7日(金)	樋口 進 (宗教センター宗教主事)	人間について考える④
10日(月)	宗教総部献血実行委員会	夏の献血週間を覚えて
14日(金)	聖歌隊	音楽チャペル
17日(月)	安田美予子 (社会福祉学科教員)	人間について考える⑤
21日(金)	能勢岳士 (甲子園教会牧師)	人間について考える⑥
24日(月)	徳田真二 (総合支援センター職員)	人間について考える⑦
28日(金)	今井小の実 (社会福祉学科教員)	人間について考える⑧
7月1日(月)	梶原直美 (神戸女学院大学講師)	人間について考える⑨
5日(金)	ハンドベルクワイア	音楽チャペル
8日(月)	牧里毎治 (学部長)	「学部長からのメッセージ」
12日(金)	樋口 進 (宗教主事代行)	春学期最終チャペル
9月20日(金)	住野公平 (人間福祉学部職員)	「ひとりであること、つながっていること」
23日(月)	木原桂二 (北山バプテスト教会牧師)	「『いやし』とは何か？」
27日(金)	創立記念合同チャペル	於: 人間福祉チャペル
30日(月)	大石健一 (茨城春日丘教会牧師)	「信仰とは決断の連続である」
10月4日(金)	池埜 聡 (社会福祉学科教員)	人間について考える⑩
7日(月)	樋口 進 (宗教センター宗教主事)	「プラス志向に生きる」
11日(金)	藤井美和 (人間科学科教員)	人間について考える⑪
14日(月)	ゴスペルクワイア (POV)	音楽チャペル
17日(木)	大学合同チャペル (第1日)	{ ※総主題: 「“グローバル”な世界に生きる」 於: B号館101号教室
18日(金)	大学合同チャペル (第2日)	
21日(月)	松岡克尚 (社会福祉学科教員)	人間について考える⑫
25日(金)	佐藤博信 (人間科学科教員)	人間について考える⑬
28日(月)	広瀬康夫 (宗教センター職員)	音楽チャペル

日時	担当者	主題（奨励題）
11月8日（金）	室田保夫（社会福祉学科教員）	人間について考える⑭
11日（月）	樋口 進（宗教センター宗教主事）	「希望に生きる」
15日（金）	聖歌隊	音楽チャペル
18日（月）	大宮有博（名古屋学院大学教員）	人間について考える⑮
22日（金）	上ヶ原ハビタット	活動報告
25日（月）	バロックアンサンブル	音楽チャペル
29日（金）	中村ゆかり（教務補佐）	クランツづくり
12月2日（月）	樋口 進（宗教センター宗教主事）	「アドベントを覚えて」
6日（金）	ハンドベルクワイア	音楽チャペル
9日（月）	大学合同クリスマスチャペル	於：B号館101号教室
13日（金）	宗教総部	「ハンセン病を覚えて」
16日（月）	海老原桂奈子（大阪福島教会牧師）	「共に喜ぶ」
20日（金）	樋口 進（宗教センター宗教主事）	「クリスマス覚えて」
23日（月）	木村知樹（西宮門戸教会牧師）	{ クリスマスチャペル： 「方程式で解けない出来事」
1月6日（月）	牧里毎治（学部長）	「今年度を振り返って」

上記のように、今年度は、春学期30回、秋学期28回、計58回（合同チャペルを含む）のチャペルを実施した。今年度は学部宗教主事が特別研究期間のため不在であったこともあり、チャペルの実施回数を週二回（月、金）とし、また、宗教主事代行を宗教センター宗教主事の樋口進先生に依頼し、チャペルの司会等を担当していただいた。例年よりチャペルアワーの回数が減少したという事情もあつてか、平均出席者数は例年を上回ったが、その反面、少々騒がしくなった。奨励の多くは例年通り、学部の教職員が担当し、今年度は特に「人間について考える」という共通テーマで、計15人の先生方に奨励していただいた。なお、ここ数年、クリスマス礼拝とクリスマス祝会を分けて、学部のクリスマスチャペルを実施してきたが、今年度は宗教主事不在のため、クリスマス祝会は実施せず、クリスマス礼拝のみを12月23日（月）のチャペルアワーの時間帯に行い、西宮門戸教会牧師の木村知樹先生より「方程式で解けない出来事」という題で奨励して頂いた。来年度は例年通りの週三回実施の体制に戻るが、今年度の反省を踏まえ、クリスマスチャペルの持ち方も含めて、さらに充実したチャペルプログラムを提供できるよう努めていきたい。

（嶺重 淑）

■ 人間福祉セミナー

人間福祉学部は、2008年の開設から6年を経過し、2013年3月には2期生を送り出した。すでに600人以上の卒業生を輩出したことになる。そのような状況を鑑み、人間福祉学部の有志の教員を中心として、人間福祉学部セミナー実行委員会が設けられ、在学生・卒業生・教職員、そして、人間福祉学部・人間福祉研究科の前身である社会学部及び社会学研究科の卒業生が一堂に会して交流を深める機会として「人間福祉セミナー」を毎年開催することになった。

第1回は2013年12月7日（土）に実施した。プログラムは以下のとおりである。

15：00～15：10 開会挨拶

牧里毎治 人間福祉学部長

15：10～15：30 学部紹介

川島恵美（社会福祉学科准教授）

山本 隆（社会起業学科教授）

坂口幸弘（人間科学科教授）

15：30～17：00 特別講演会 「人間福祉学部に期待すること」

武田 建氏

（関西学院大学名誉教授、元関西学院大学学長、元学校法人関西学院大学理事長）

17：00 閉会挨拶

室田保夫（社会福祉学科教授、次期学部長）

17：30～ 懇親会 於 新学生会館「OFF TIME」

今回のセミナーには、社会学部の卒業生・人間福祉学部の卒業生を中心に、元教員、特別講演会講師であった武田氏のファンという方々まで、100人余りの方が参加してくださった。武田氏は、専門である行動理論を、子育て、スポーツや職場におけるコーチング、教育場面など、仕事や日常においていかに応用するかという内容を中心に、わかりやすく楽しく話してくださった。久しぶりに同氏の「漫談」を堪能された卒業生も多く、アンケート結果でも非常に好評であった。

懇親会は、学内開催であるためアルコール抜きであったが、70人以上の参加があり、卒業生・在学生・教職員が旧交を温める良い機会となった。

今回のセミナーの告知は、ゼミ教員からのコンタクト、卒業生に送付される母校通信の他、大学のホームページ、大学や実践教育支援室のフェイスブックなどSNSも活用した。海外も含め遠方の卒業生からもメッセージが届くなど、多くの方々とのつながりが実感できた。しかしながら、こうした方法で全ての卒業生に告知を行き渡らせることは難しく、その方法については今後の課題である。

次年度以降も開催を継続して、人間福祉学部に連なる多くの方々とのつながりを深めていきたいと感じている。最後に、今回の開催にあたってご協力をいただいた全ての皆様に心から感謝したい。（人間福祉セミナー実行委員会サブコンビナー
川島恵美）



■ 人間福祉学部優秀卒業研究賞「あじさい賞」

人間福祉学部では、浅野仁名誉教授の寄付により、優秀な卒業研究を執筆した学部学生の努力を称えるため、優秀卒業研究賞（通称「あじさい賞」）を設けています。

名前の由来は、あじさいを同氏が好まれたことによります。

最優秀賞・優秀賞には表彰状と副賞（図書カード10,000円）が贈られます。

2012年度の受賞者は次のとおりです。

・最優秀賞 該当なし

・優秀賞

藤原 祐介、並川明日香、平尾愛津紗、山本千里
「オストメイトの障害について
オストミー協会へのインタビュー
調査を通じて」

鈴木 涼平 「ジェンダーと恋愛から見る若者の
生きづらさ」

宮前 智子 「知的障害者施設に対する地域住
民のコンフリクトを緩和する要因
に関する考察—A市の障害福祉
サービス事業所や行政との関わり
を通して—」

上山美津穂 「いのちに向き合う子どもとスピ
リチュアリティ」

人間福祉学部優秀卒業研究賞規程

(目的)

第1条 学校法人関西学院は、浅野仁氏（本学名誉教授）よりの寄付金をもって、人間福祉学部優秀卒業研究賞を設定する。

2 この賞は、人間福祉学部学生の学習・研究意欲を高め、勉学の向上をはかることを目的とする。

(資格及び交付)

第2条 この賞は、毎年人間福祉学部において優秀な卒業論文等を執筆した学生に授与する。受賞者を毎年若干名とし、受賞者には賞状と副賞を授与する。

(所管及び運営)

第3条 人間福祉学部に優秀卒業研究賞（浅野賞）選考委員会を設け、受賞者の選考に当たる。

2 選考委員会の構成及び選考方法については別に定める。

(規程の改廃)

第4条 この規程の改廃は、選考委員会の議を経て、人間福祉学部教授会で決定し、理事会の承認を得るものとする。

附 則

この規程は、2011年（平成23年）4月1日から施行する。